



同志社人物誌 (15)

宮川経輝

高橋 虔

小崎弘道、海老名禪正、宮川経輝の三先輩は通常旧組合教会の三元老と呼ばれている。そのうち宮川経輝は僅少の差であるが、三人の中の最年少者であった。日本のキリスト教会特に旧組合教会に対するこの三人の貢献は

彼らの歿後において、いよいよ高く評価されている。彼らの同志社に対する貢献は同様に注目すべきものがあり、特に小崎、海老名の二人は同志社の社長、総長として校祖新島先生の衣鉢を伝えたことは、広く知られている（宮川もかつて同志社総長就任を勧められたこともある）。同志社と組合教会とは全く別

個の団体で、その間には何ら制度上の関係はなく、時には相反目して緊張関係を続けたこともあった。同志社神学校も組合教会立の教派的神学校ではなく、言わば認可神学校のごときものであった。しかし世人は組合教会と同志社とを同一の団体のように思惟し、また事実両者の危急存亡の時には両者が互いに牽制、協力し合って、その歴史を維持してきたのである。人物の交流、資金の調達などのことにおいても、両者の間にチェック・アンド・バランスの原則が行なわれていたと見られよう。そのため不必要な摩擦や誤解が生じたことも事実であるが、伝道と教育の車の両輪は相互の欠陥を満たし、また同時にその中間に、卓越したキリスト教社会福祉事業に従事する者を多く輩出し、それら伝道、教育、社会福祉の第一線に挺身している人々の背後には多くの同志社人の後援者が厳として存在していたのである。このような、キリスト教主義学校のあるべき姿はすでに三元老の時代に考えられ、また実現されたことと見ることができ。このことはそれぞれの側に必ずしも意識せられていた訳ではないが、結果としてそのような原型を造りあげたのである。その意味

において組合教会も同志社も閉ざされたる団体ではなく、開かれた団体となつて、両者共に自己完結的また閉鎖的共同体となることを防いだのである。この種の先人の遺産は今日のわれわれが特に継承すべきものであつて、同志社からは教会の維持者、協力者を輩出し、教会側からは信仰ある教育者やその志願者を送り込み、内外の教会はその財的援助をも惜しまなかつたのである。新島先生の畢生の目的は「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」であつたと言われている。

三元老はいわゆる熊本バンドに属する人物であつて、彼らは熊本バンド特有の共通性を兼ね備えていた。彼らは明治初期の社会的變動の時期に際し、薩長土肥の富国強兵策に對して、科学的、精神的教養の必要を痛感していた。その具体的模範はゼーンス大尉と新島先生とであつた。彼らには明治維新の指導者と共通する国家主義も見られるが、その内容は物と心との相違であつた。肥後藩は明治維新に貢献した横井小楠初め多くの先覚者を輩出したが、薩長土の三藩に比してパスに乗り遅れた感があつた。そのため一部の青年は政治的現実主義に對して、宗教的理想主義を

唱え、洋学校の開設を機としてこの傾向に拍車をかけたものと見ることが出来る。ただしゼーンス大尉と熊本バンドの青年たちの出合いは言わば咄嗟の間の出来事であつて、そこには深い神の摂理があつたものと認めざるを得ない。

2

周知のごとく、宮川経輝の生家は阿蘇神社の社家の系統に属し、代々神道の傳承を受け継いでいた。その意味においては、宗教的背景を最も多く担つていた。しかし宮川の思想の中には神道に根ざしていると思われるものは比較的少ない。むしろ青年時代に受けた漢学、儒教の精神が長く続いていたようである。次に引用する部分は明治三十五年の第九回組合教会教役者会において「日本在来宗教思想と基督教」と題する講演の一節であるが、その参考書として、町元天空著『十二宗綱要』、平田篤胤著『鬼神論』、加藤咄堂著『日本宗教風俗志』、ソーサー著『サイエンス・オブ・レリジョン』、長田偶得著『平田篤胤』、その他『仏教史林』『日本宗教』等を挙げている（大阪講壇、明治三十五年十一月二十号）。

「私は神道の家に生まれ、元來これを研究するに便利なる地位におりににもかかはらず、當時これを馬鹿にしておりましたが、近頃少しく慎重の態度を以て研究する氣になつたので、考へればその間に偉大なる神道の派流があつて、本朝の歴史を一貫して居るのを見る。單に神道は八百万神を祭り、恰も自然崇拜のように見える。元よりこれは多神教には違ひなきも、追々發達し來りて單一神教、即ちヘノシーズムの域に達したるもので、多くの神の中より一つ或は數個の超然たるものを取つてその基礎を樹立した。我日本に於ては或は三皇靈の神を立て、或は天御中至尊を立て、或は国常立神を立てた。即ち天神地祇を崇拜すると言ふことは、その間の一の思想と思はれる。この單一神が造化の神と言ふことに眼がついて來たのであるが、これだけであるならば、或は神道格別に力なしに済んだかも知れない。然るに神道は我國體に對し、切つても切れない聯結をつけた故に、我歴史を一貫する大潮流となつたのである。さればこれは何時頃より起つて來たのであるかと言ふに、明かではないが、平田篤胤氏の如き

は、皇徳天皇三年四月の詔に、「惟神」(かみながら)という語があり、その解に惟神には神の道に随ひ亦自ら神道あるなりということを屢引用し、釈潮音は聖德太子旧事本記を作り給ふ、これ神道の始めなりと言っている。それは兎も角も、この単一神教が我團體に固く結び付いたことは明白である。かの仏教が渡来した時には、神道はこれに反抗するだけに進んで居ったことは事実である。聖德太子が仏教に帰依して、上より逆落しに伝道せんと試みたが、この太子も神道に反抗するは伝道上損であることを思ひ、大臣と共に百僚を引率して神祇を祭ったと言う事がある。又奈良朝以前に渡来した仏教は、俱舍、成実、律、法相、三輪、華嚴の諸宗であつたが、堂宇伽藍は輪奐の美を極め、中々壯観であつたが、当時未だ民間には広まらなかった。行基、良弁の徒出でて神道仏教の調和に苦心し、その結果終に彼の大仏の建立となつた。この大仏は盧遮那仏と言ふので、天照大神の変身なりと唱道された。又平安朝時代には伝教大師が天台宗を創始し、比叡山を開いたが、これは本地垂迹を唱へ、叡山に大山咋神と

大物主神を祭つた。……又その頃山中に二十一社をも祭つた。又かの弘法大師は真言宗を創始し、高野の靈地を開いたが、これも丹生津姫神を祭り、両部習合神道を唱へた。……かの一遍上人が、熊野権現の神勅を振り時き、それによって念仏宗を広めたと言ふ話もある」。

以上簡単ではあるが宮川の神道観を窺い知ることができ、また仏教の土着化の過程における神道の役割についての考え方を知ることができる。さらに神道の積極的価値およびその実勢力について次のように述べている。

「私共はこの偉大なる神道の潮流に対し、如何なる方針を取るべきか既に諸君に於ては御覚悟のあることと存じますが、今やこれに対する道を講ぜなければならぬのであります。神道は偶像教の様であり又見識あるもの、信奉すべきものでないかの様であるが、現今科学だの哲学だの研究している先生達に付いてその思想を叩けば、この天神地祇を崇拜することは確かに一種の勢力となつてゐる。曾て穂積博士が祖先崇拜論なるものを書いたが、これは我国幾多の人々の思想感情を代表するものである。又近

時青年にこの感情のあるや否や大に研究すべきである。兎も角私共常に驚嘆に堪へざることは、維新前否寧ろ維新後に於て、彼の俗神道とも言ふべき、黒住、丸山、禊、御嶽、天理教等の如きものが起つて来たが、その教会数八千五百六十八、教師数九万三千四百六十六人、信徒総数は二十八十万人以上に達している。仏教各派の総数は統計に現われている処はこれより少い。実にこの神道各派は仏教徒の領分を冒したので、その神道的崇拜の根底のあることを認めなくてはならないのである」。

このように宮川は神道に深い根底のあることを認め、それは仏教の力を上廻るものと觀察したようである。この神道と仏教また儒教との間に伍してキリスト教が如何なる態度を保つべきかに付いては明白なる発言はない。清水安三、魚木忠一兩氏も指摘しておられるように、宮川は近江聖人中江藤樹の思想がキリスト教信仰に近いことを感得している。明治三十五年の「元始論」と題する説教の中に次のように述べている。

「日本の漢学者の中にも造物主のあることを考へた人がある。主宰のあることを考へ

た人がある。伊藤仁斎でも、物部祖徠でもやはり天地万有の主宰がなければならぬと言ふ事だけは考へたのである。独り近江聖人中江藤樹に至つては、私共が自然神学の中に学ぶような事を申しているが、これは実にどうでも近江聖人の氣高くしてすべての學者に優つた所以であらうかと思ふ。太乙神経の序文に、太乙尊神者、書所謂皇上帝也。夫れ皇上皇帝は太乙の神靈、天地万物の君親にして、六合微塵、千古瞬息、無所不照臨。どうです基督教を知らない藤樹先生が、どうしても天地万物の君となり親となる方がいらせられる。そのお方は瞬く間もこの広き天地を照しなさらぬことはないと言ふのである。尚進んで、その妙用大虚に流行して至神至靈、……その尊貴独にして對なし、その徳妙にして測られず、その本無名号、聖人強いて之に写して大上天尊太乙神と言ふ。而して人をして生養の本を知りて敬して以て之に事へしむ、とあるが、実に藤樹先生は天地の神の在しますことを知つた。無限絶体の神はただ独りであつて、もう決して相對するものがない。この神は見ざる所なく、知らざる所なく、

至らざる所なき徳を備へ給うので、何ともお名前の付けようがない。聖人は強いて大上天尊太乙神と唱へる。ただ我々はそれが生命の本であると知つて敬ひお事へ申す、と言つてゐるが、キリスト・イエスが藤樹先生にお現はれになつたならば、先生はアアそれが天の父だ、それが我が慕つてゐる父だ、我は全心全力を以てこれを愛しませうと言ふことになつたかも知れない。

以上によつても知られるように、在來の宗教としては、儒教特に中江藤樹の思想と深く共鳴する所があつたようである。これは間接に横井小楠の感化によるものと思われる。この意味において宮川のキリスト教思想は、「祭天の古俗」である神道や、哲理に深い仏教を離れて、常識的な儒教と近づいてゐた。それと共に宮川は日本民族の国家的使命について確信を持ち、キリスト教化された日本民族にも獨特の使命があることを深く感じてゐた。晩年には日本の伝道者に和漢の素養の薄らいで行くことを嘆き、会う人毎にそのことを訴えてゐた。明治三十二年十二月四日、ベルリンより大阪教会信徒に宛てた手紙において次のように述べてゐる（大阪教会沿革略史六七頁）。

「拜啓仕り候。キリスト降誕節もめでたく済ませられ、新年も幾多の希望と決心を以て迎へさせられ候御事と予想し、万々奉祝賀候。小弟は兄弟方とは凡そ十時間遅れて世界の大都府たるロンドンにて新年を迎へ可申予定に御座候。所謂基督教國中にて屈指の強國英米独の大都會を視察致し候に、主の聖旨に適はざる事のみ多く有之、殊に歎かはしき事は主の現在し給はざる教會を見受くる一点に御座候。我等日本信者は教會の祖先となり、我國の光塩たる大責任を双肩に負担仕り候ものなれば、現時の欧米信者輩に倣ふ事なく、二百余年前に於ける英のビュリタン、仏のヒューゲノーの跡、独にては宗教革命時代の傑士を慕ひ、勇往邁進の王国を建設し、末日の審判には、主と共に所謂基督教國の信者を判するの位置に立ち度きものに御座候。小弟帰朝の日には愈愛兄弟と共に天父の台前に新生命を以て御面会致し度く、何卒弟が烈火の精神を得て帰朝する様御祈禱切望仕り候」。

右のように「現時の欧米信者輩に倣ふ事なく」と大氣焰を吐いてゐるようであるが、このような態度は組合教會の先輩に見られる共

通点であつて、一面国家的民族的に走つた嫌いはあるが、早くから日本のキリスト教の独自性、独立性を強調し、現時のいわゆる土着化の考への基礎を与えたものと見る事ができる。宮川が米国を経て欧州大陸に渡つた時は、言語の不通にもかかわらず、むしろ居心地がよかつたと述べて、ベルリンよりの来信の一節には次のような感想を洩している。(大阪教会沿革略史六六頁)

初日本出発前より、大陸にては言語不通に付き、何の研究も出来不申見込にて、勿々通過可致き考への処、實際は全く予想に異なり、言語を解せし英米よりも頗る居心地よろしく、且研究すべき材料も甚だ豊富に御座候間、先づ一ヶ月位当地に滞在致す事に決定仕り候」。

ここに英米的キリスト教と共に、大陸的キリスト教を玩味すべき必要を感じたのであるが、それは宮川の時代には実現せず、その後継者らに委ねられたのである。わが在来の諸宗教と共に欧米のキリスト教諸派、ユダヤ教、回教等に対する態度決定は今日のキリスト者にとつても重大な問題であるが、それらの問題の処理によつて今後わが国におけるキリスト教の展開も方向付けられることであらう。

(神学部長・旧約学概論)

THE NINETIETH ANNIVERSARY OF THE DOSHISHA 1875-1965

同志社創立九十周年記念行事

一、記念週間行事

創立記念週間	全交會	国際ホテル	11月26日—30日
同窓會デー	栄光館・唐崎ハウス	11月20日	午後
記念礼拝	栄光館	11月27日	正午
リユニオン	学内	11月28日	午前10時
イヴ音楽會	未定	11月28日	正午
早天祈禱會	若王子墓地	11月29日	午前6時30分
創立記念式典	同志社グラウンド	11月29日	午前10時
午餐會	大学記念會館	11月29日	正午

二、展覧會および講演會

A 展覧會「新島襄と同志社」	名古屋	オリエンタル中村	10月下旬—11月上旬
	大阪	高島屋デパート	11月16日—21日
B 講演會	東京	会場未定	「徳富蘇峰」遺墓展と共催
	札幌・仙台・広島・熊本		9月—11月

三、その他

A 「同志社九十年小史」刊行	A 5判約六〇〇頁	10月末刊行
B 熊本バンド記念碑建立	熊本市花岡山頂	11月上旬
C 「同志社の歌」募集	歌詞締切り	5月31日

創立九十周年記念行事委員会

THE NINETIETH ANNIVERSARY OF THE DOSHISHA 1875-1965